

## 草地更新前のライ麦栽培で飼料を確保！

(道東地域における牧草夏播種年の飼料収穫量向上のための秋まきライ麦栽培法)

飼料生産技術グループ 角谷 芳樹

(E-mail: sumiya-yoshiki@hro.or.jp)

### 1. 背景・ねらい

除草剤秋夏体系処理の草地更新で耕起翌年に牧草を播種する場合、または飼料用とうもろこし畑から草地への転換時に春雑草との競合を避ける場合、牧草の播種は夏に行われます。前年の牧草またはとうもろこし収穫から牧草夏播種までの期間を利用することで、単位面積あたりの飼料収穫量を向上させる技術が求められています。

そこで、牧草またはとうもろこし収穫翌年の草地更新(夏播種)までの期間を利用した秋まきライ麦の栽培特性を明らかにし、単位面積あたり飼料収穫量の向上を可能とする飼料作物栽培体系について検討を行いました。

### 2. 技術内容と効果

#### 1) 秋まきライ麦の栽培特性

秋まきライ麦は収穫時期が同じ場合、10月上旬中旬播種と比較して9月中下旬播種で乾物収量が多い傾向がありました。生育ステージの進行に伴い乾物収量が増加する一方でTDN含量は低下しました(図1)。8月下旬または9月上旬播種では、9月中旬播種と比較して乾物収量は減少し、冬枯れ程度は同等～高い値を示しました。ライ麦の乾物収量は単純積算気温(Ts)を用い、 $乾物収量(kg/10a) = 1.39 \times (播種年 Ts) + 1.50 \times (播種翌年 Ts) - 914.7$  の重回帰式( $R^2=0.88$ 、播種年 Ts:播種翌日～根雪始、播種翌年 Ts:根雪終～収穫日)で推定でき、地域間差は見られません

でした。牧草の夏播種更新前にライ麦を栽培する場合、播種時期は9月中下旬、収穫時期は乾物収量の増加に伴うTDN含量の低下や、1番草収穫作業時期を考慮すると、根釧地域で6月上旬中旬、十勝地域で5月下旬～6月上旬の出穂期までとすることが望ましいと考えられます(表1)。

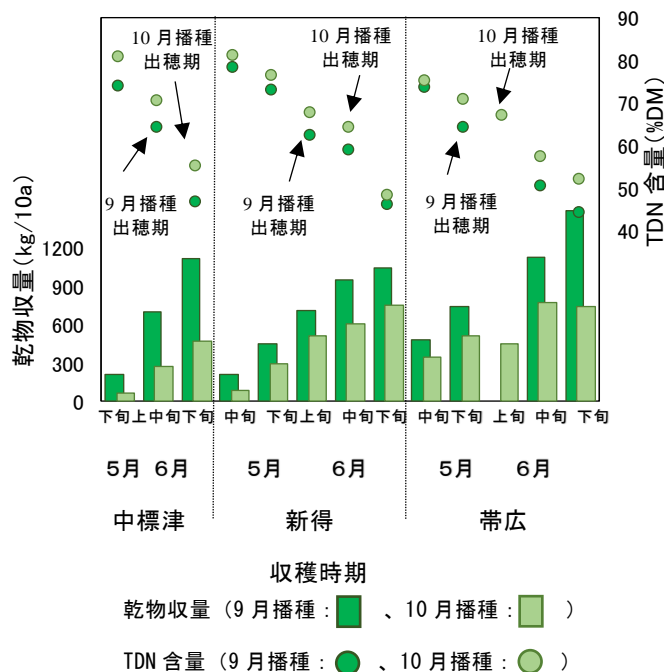


図1. 播種および収穫時期別の乾物収量およびTDN含量の推移

#### 2) ライ麦栽培後の牧草播種床造成法

除草剤無処理またはディスクハロでの表層攪拌による播種床造成で年間雑草乾物重量が多くなりました(図2)。ライ麦栽培後の安定した草地造成のためには、簡易更新をする場合、ロータリハロによる表層攪拌が推奨され、除草剤播種床処理が必要です。

